







病害虫発生予察情報予報第 13 号 (4 月の予報)



佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項


作物名	病害虫名 ^{注1)}	4 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
大麦および小麦	赤かび病	やや少	やや少	130~132	 赤かび病
	うどんこ病	並	並	135	
	1. 赤かび病 圃場ごとの生育状況を確認し、適期に防除を行う。なお、出穂期以降に高温 (20~27℃) で、降雨が続く場合には、追加防除を実施する。 大麦の防除適期は、蒴殻抽出始め (出穂期の約 2 週間後) で、更に、その 7 日後頃に 2 回目の散布を行うと効果が高まる。「はるか二条」は既存の品種より本病にやや弱いため、2 回防除を基本とする。 小麦での防除適期は、開花期~開花最盛期 (出穂期の約 10~14 日後) である。更に、開花 10~20 日後に 2 回目の散布を行うと効果が高まる (開花約 10 日後の散布は発病抑制、開花約 20 日後の散布はカビ毒抑制効果が高い)。本病の発生が多い「パン用コムギ」については、2 回防除を基本とする。				
大麦	網斑病	並	並	133~134	
	1. 網斑病 県内各地で発生がみられ、一部の圃場では上位への進展が認められる。発生状況を確認し、発生圃場では出穂期~穂揃い期に本病を対象とした薬剤防除を行う。				
水稻	いもち病	並	並	124~133 135~140	 いもち病
	ばか苗病	並	並	124~133	
	1. いもち病 昨年、多発生した地域では、菌密度が高まっていると考えられる。既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種籾消毒を徹底し、いもち病発生地域では育苗期から防除を行う。				

作物名	病害虫名 ^{注1)}	4 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
タマネギ	べと病	早生マルチ	やや多	260~262	 タマネギ べと病 一次伝染株
		中晩生	やや多		
	ポトリチス葉枯症	やや少	並	263	
	ネギアザミウマ	やや多	多	270~271	
1. べと病 各作型で二次伝染による病斑の発生がみられている。「定期的な切れ目ない薬剤防除」を地域ぐるみで確実に実施する (平成 31 年 3 月 8 日付け病害虫発生予察注意報第 3 号参照)。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^注	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	ハダニ類	並	やや少	208~209	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	198~200	
	灰色かび病	並	並	201~202	
	アブラムシ類	やや多	並	213~214	
<p>1. 炭疽病（育苗圃） 病原菌の伝染を防止するため、雨よけ育苗を行い、ランナー伸長初期からの定期的な薬剤防除を実施する。</p> <p>2. アザミウマ類 発生が多い。果実での被害を防ぐため、発生を認めた場合は薬剤防除を行う。</p>					
キュウリ	べと病	やや多	多	178~179	 キュウリ うどんこ病
	うどんこ病	多	多	176~178	
	褐斑病	並	やや多	181~182	
	灰色かび病	並	並	179~180	
	アザミウマ類	やや少	並	190~191	
	コナジラミ類	並	並	189~190	
トマト	葉かび病	多	並	225~226	 葉かび病
	灰色かび病	やや少	やや少	220~221	
	コナジラミ類	やや多	やや多	151~153 228~230	
<p>1. タバココナジラミ：黄化葉巻病 黄化葉巻病を媒介するコナジラミ類の発生が多い。本虫に対する薬剤防除を徹底するとともに、ウイルス病罹病株の発生を認めた場合は早急に除去処分する。また、野外からの媒介虫の飛び込み防止にも努める。</p>					
ナス	すすかび病	並	やや多	235~236	 菌核病
	灰色かび病	並	並	234~235	
	菌核病	並	並	237	
	アザミウマ類	やや少	やや多	154~158 241~242	
	コナジラミ類	並	並	151~153 242~243	
アスパラガス	アザミウマ類	並	並	322	
	<p>1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 立茎開始初期からで薬剤防除を行う。また、発病茎は伝染源となるため、見つけ次第地際部から切圃場外で適切に処分する。</p>				
施設果菜類	<p>1. 虫害全般（アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類） 気温が高くなるに従い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。被害を防止するため、低密度時からの薬剤防除を実施する。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害(抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	並	少	239~242	
	1. 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ) 平成31年3月13日付け病虫害対策資料第15号を参照。				
カンキツ	そうか病	並	並	209~211	 ミカンハダニ
	かいよう病	並	並	213~215	
	ミカンハダニ	多	多	234~237	
	1. ミカンハダニ 殺ダニ剤に対する抵抗性発達を避けるため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。 2. かいよう病 前年発生園や風当たりが強い園、罹病性品種(レモン、ネーブル、はるみ等)の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園(幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等)では、展葉初期の防除を徹底する。				
ナシ	黒星病	並	並	279~282	
	1. 黒星病 本病の重要な防除時期である開花直前~落弁期は、7~10日間隔で薬剤防除を徹底する。SSで散布を行う場合は必ず全列散布を行う。なお、降雨が続く場合はDMI剤の追加散布を行う。				
ブドウ	黒とう病	並	並	327~329	
	1. 黒とう病 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期~生育初期の薬剤防除を徹底する。				
キウイフルーツ	かいよう病	1. かいよう病 枝や幹から乳白色あるいは赤褐色の樹液が漏出する症状(右写真参照)の早期発見に努め、発見した場合には直ちに罹病部位を切除する。また、 <u>すべての園において</u> 、6月まで感染防止のための銅水和剤及び抗生物質剤を主体とした 定期的な薬剤防除を実施 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすいため、薬剤防除を徹底する。			 かいよう病による樹液の漏出

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害(抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや多	やや多	410~411	
	1. 赤焼病 本年は発生が多くみられる。多発園場では一番茶後に深刈り等を行い、病葉、病枝を除去し伝染源を少なくする。 2. チャトゲコナジラミ 新植、改植を行う場合は、定植する苗木に本虫の寄生がないか確認する。寄生を認めた場合は枝葉を落として定植し、定植直後にマシン油乳剤を散布する。なお、切除した枝葉は土中に埋設するなど適切に処分する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キク	白さび病	並	やや少	386~387	 <p>クロゲハナアザミウマ</p>
	アザミウマ類	多	多	391~392	
	アブラムシ類	やや多	やや多	393~394	
	ハダニ類	並	並	392~393	
	ハモグリバエ類	並	並	395~396	
	<p>1. クロゲハナアザミウマ 一部圃場で発生が多い。成長点や葉裏での発生状況をよく確認し、低密度時からの薬剤防除を実施する。薬剤は、葉裏や下位葉にも十分かかるように散布する。</p> <p>2. ミカンキイロアザミウマ：えそ病 (TSW) 一部圃場で発生が認められる。本虫はえそ病を媒介するため、発生初期に薬剤防除を徹底するとともにウイルス病の罹病株を認めた場合は早急に除去し処分する。</p>				

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

4 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 4 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（平成 31 年 3 月 21 日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 4 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (15.0℃)	40	やや高い
降水量	40	40 (198 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 4月の予報

麦類

定期調査（大麦22圃場、小麦22圃場）
3月15日～19日



巡回調査圃場の様子(左:大麦、右:小麦)

1. 赤かび病

1) 予報の内容

発生時期：平年より早い（前年より早い）

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 麦の生育状況と本病の発生時期

平成30年11月下旬～12月下旬播きでは、節間伸長開始期は大麦、小麦で早い（農業試験研究センター・県米麦改良協会：平成30年3月1日付け麦づくり情報第3号）。今後、気温が平年並で経過すれば、出穂期は平年より早くなる見込みであり、本病の発生時期は平年より早くなると予想される。

(2) 4月の気象予報

降水量は平年よりやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

2. 網斑病（大麦）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生茎率2.6%（平年2.1%、前年2.7%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 4月の気象予報

降水量は平年よりやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

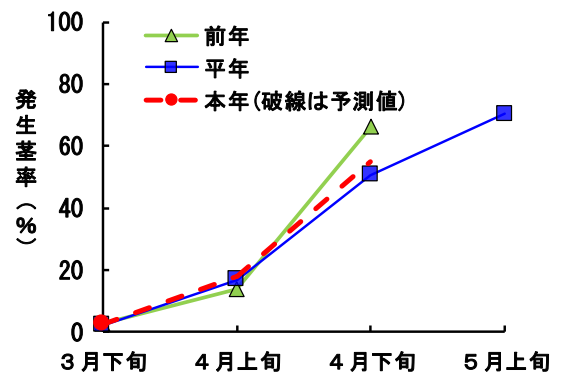


図1 大麦網斑病の発生推移

水稻

1. いもち病（苗いもち）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成30年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稻（8月上旬）で1.7%（平年4.6%）、北部山間の早植え水稻（9月上旬）で2.0%（平年10.5%）、普通期水稻（10月上旬）で12.9%（平年15.7%）であり、早期は平年よりやや少なく、早植えは平年より少なかったものの、普通期は平年並であり、多発生した地域も一部でみられた。

以上のことから、一部の普通期水稻で発生が多かったものの、圃場等での菌密度は平年並と考えられる。
 〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 種子更新を徹底する。
- (2) 育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいので、覆土を適正に行う。
- (3) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
- (4) 長期残効型の育苗箱施薬剤を施用する。
- (5) その他については、特記事項を参照する。

タマネギ

(定期調査 20 圃場)
 調査日：3月19～20日



定期調査圃場の様子

1. ベと病（早生マルチ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0.02%（平年0.50%、前年0.08%）

平年比：やや少〈一〜±〉 前年比：やや少
 〈一〜±〉

②一部圃場において二次伝染株の発生がみられて
 いる〈+〉

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件
 〈一〜±〉

(3) 暖冬傾向で推移したため、生育が進んでいる。〈+〉

※鱗茎肥大開始期以降にべと病の感受性が高まることが報告されており、感受性の高まる時期の開始が早まることが予想される。

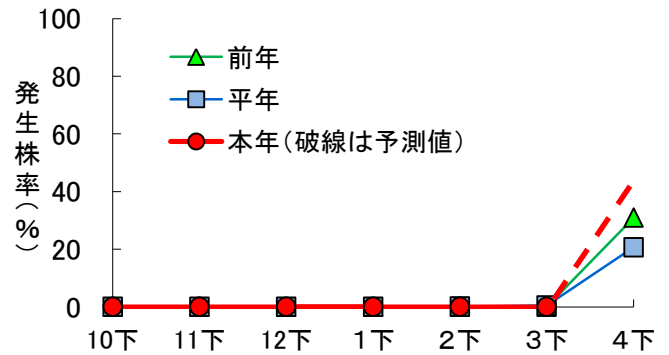


図1 タマネギべと病(早生マルチ)の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

2. ベと病（中晩生）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0.14%（平年0.30%、前年0.29%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

②一部圃場において二次伝染株の発生がみられて
 いる〈+〉

(3) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件
 〈一〜±〉

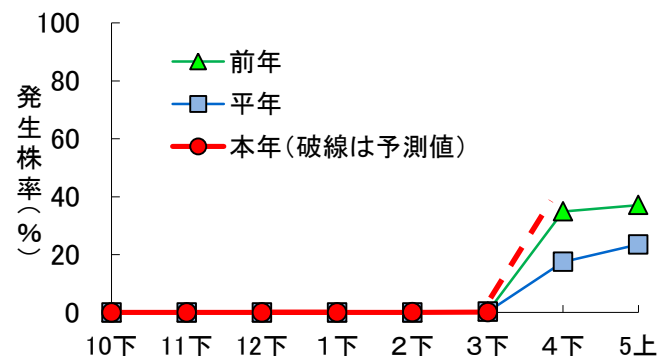


図1 タマネギべと病(中・晩生)の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

3. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.9%（平年10.5%、前年0%）

平年比：やや少（-~±） 前年比：並（±）

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-~±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

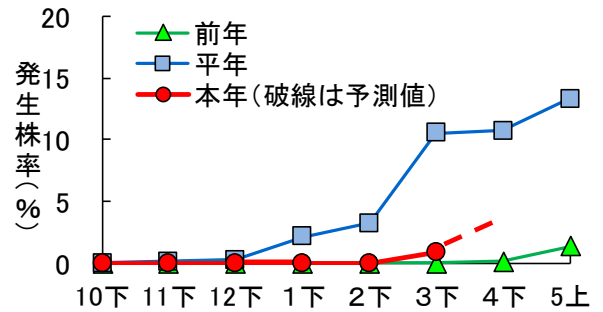


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移
注) 4月下旬以降は、中晩生品種を中心に調査

4. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：4.5%（平年5.5%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±~+）

(2) 4月の気象予報

気温は平年よりやや高く、やや多発生の条件（±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期にかけむらがないように薬剤防除を実施する。

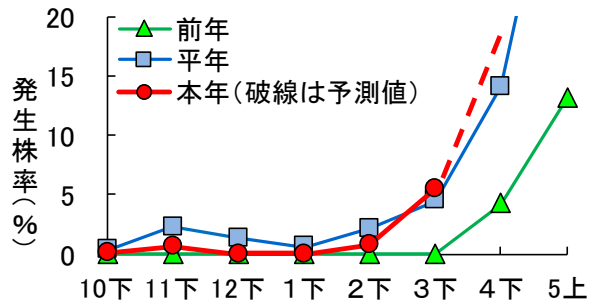


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移
注) 4月下旬以降は、中晩生品種を中心に調査

イチゴ（本圃）

（定期調査 11 圃場、防除員 6 圃場）
調査日：3月15~19日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：6.5%（平年21.0%、前年29.9%）

平年比：やや少（-） 前年比：少（-）

② 定期調査以外の圃場において、発生が多い圃場がある（±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着する

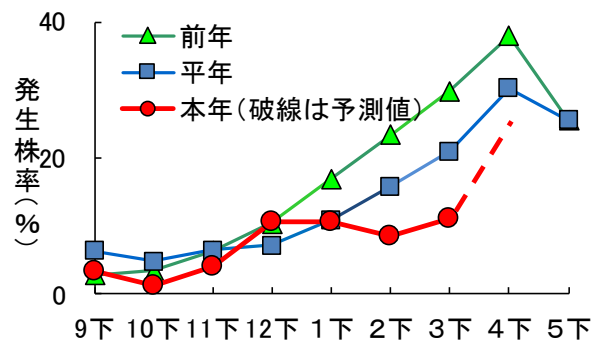


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

ように十分量を丁寧に散布する。

2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年4.6%、前年0.9%）
平年比：少（-〜±） 前年比：やや少（-〜±）
 - ② 4月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-〜±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生初期に薬剤防除を実施する。

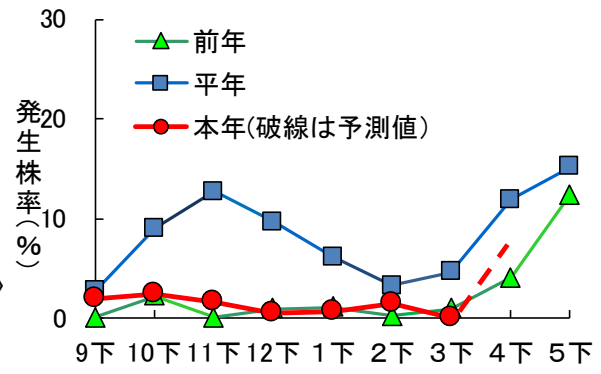


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：0.5%（平年0.2%、前年1.6%）
平年比：やや多（±〜+） 前年比：やや少（-〜±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 薬剤防除の際は、発生初期にミツバチへ影響の小さい薬剤を散布する（県病害虫防除のてびき P541～544）。

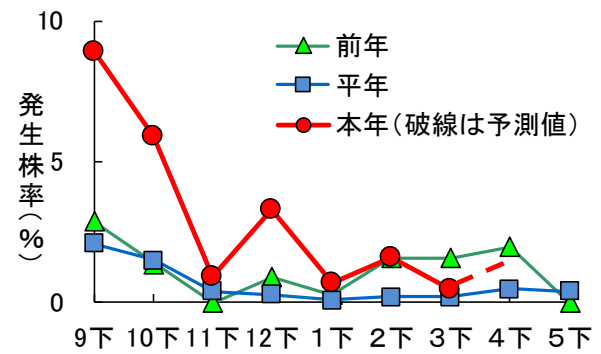


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

（定期調査8圃場）
調査日：3月18日～19日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：15.0%（平年3.7%、前年0%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - ② 4月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-〜±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生初期に薬剤防除を徹底する。

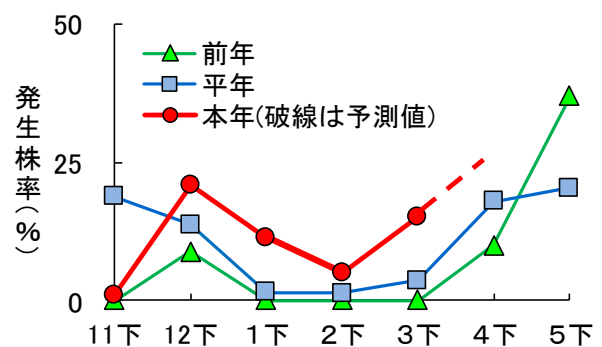


図1 キュウリべと病の発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：18.8%（平年7.0%、前年8.8%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なくやや少発生の条件

〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 硫黄粒剤のくん煙や硫黄水和剤等の耐性菌が出にくい剤を組み入れて薬剤防除を行う。

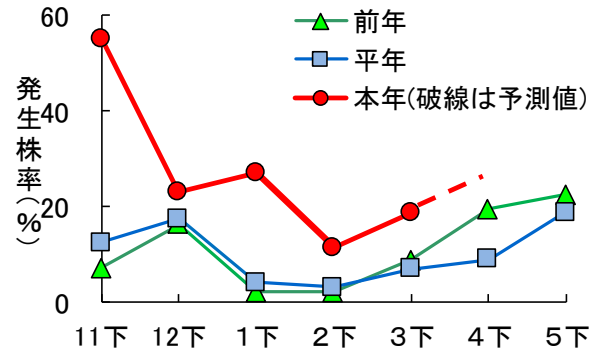


図1 キュウリうどんこ病の発生推移

3. アザミウマ類（本文掲載）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年3.4%、前年0%）

平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：並〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項（施設野菜類の項）を参照。

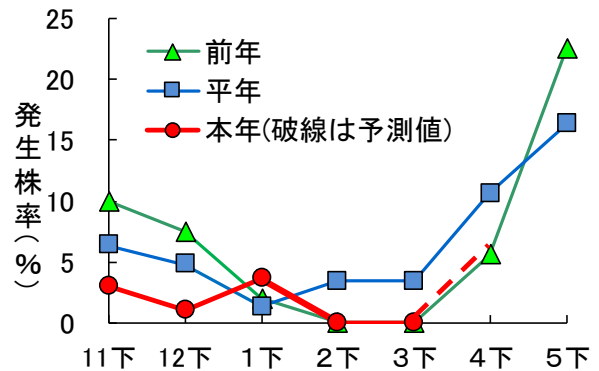


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移



定期調査圃場の様子

トマト

定期調査：12圃場

調査日：3月15～20日

1. 葉かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：12.5%（平年3.8%、前年12.5%）

平年比：多〈+〉 前年比：並〈±〉

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生がみられる圃場では、発病部位の除去と系統（FRACコード）の異なる薬剤（防除のてびき P479-482 参照）を組み合わせる薬剤防除を実施する。

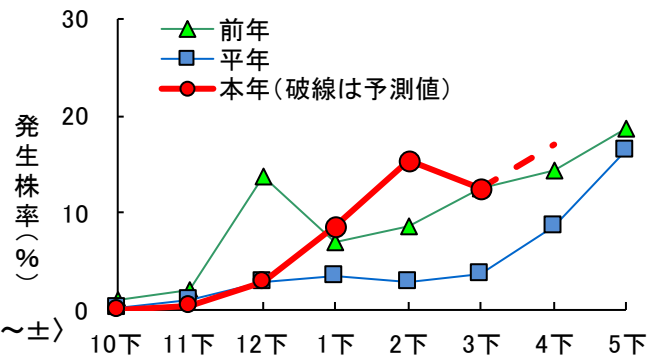
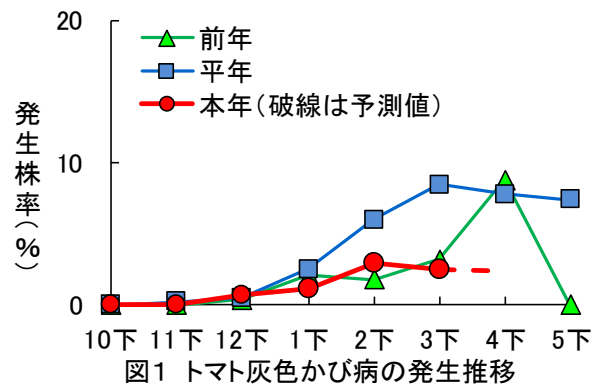


図1 トマト葉かび病の発生推移

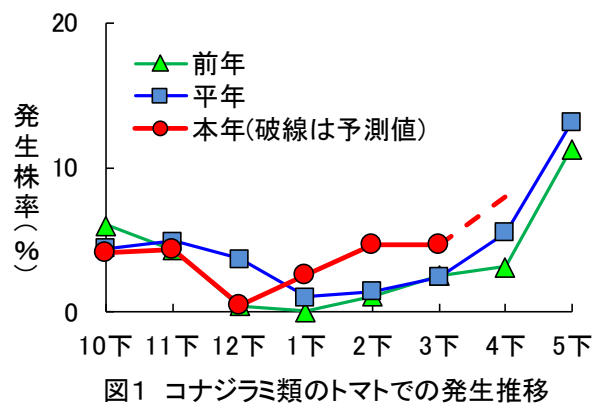
2. 灰色かび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：2.5%（平年8.5%、前年3.2%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - (2) 4月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生がみられる圃場では、発病部位の除去と系統（FRACコード）の異なる薬剤（防除のてびき P479-482参照）を組み合わせる薬剤防除を実施する



3. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：4.6%（平年2.4%、前年2.5%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。



ナス（促成）

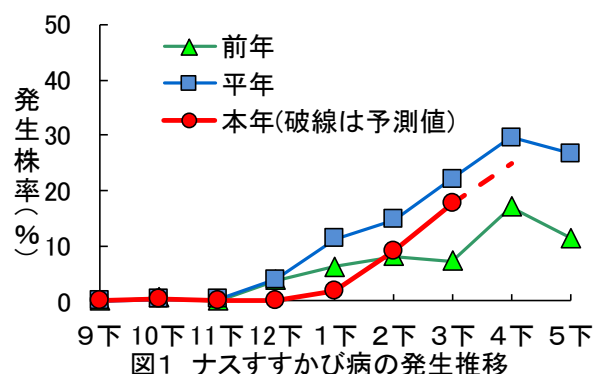
定期調査：13圃場
調査日：3月14～18日



定期調査圃場の様子

1. すすかび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：17.7%（平年22.1%、前年7.3%）
平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）
 - (2) 4月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発病葉は伝染源になるので早めに除去し、圃場外で適切に処分する。
 - (2) こまめな換気を行うとともに、循環扇や加温機を活用し、施設内および葉面の結露を防ぐよう努める。



2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.7%（平年1.6%、前年4.2%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

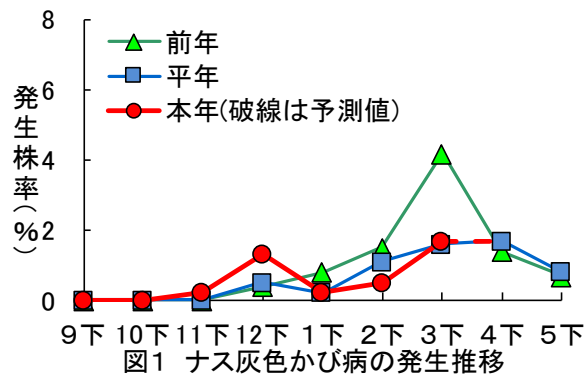
(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に残った花弁はできるだけ取り除き、過湿にならないよう定期的に換気を行う。特に、『PC筑陽』は花弁が残りやすいので、確実に取り除く。

(2) 発生を認めた場合には、発病部位は早めに除去し、防除を実施する。



3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：2.7%（平年7.6%、前年2.3%）

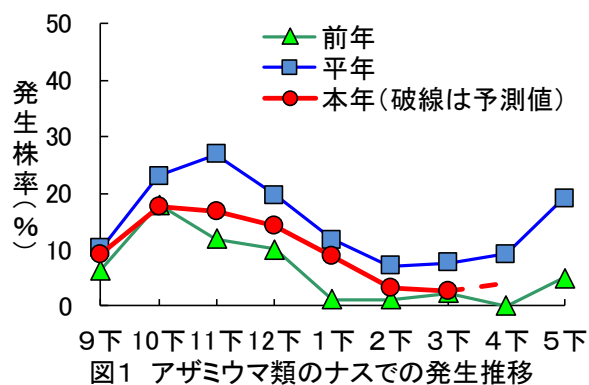
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 特記事項（施設果菜類）を参照。



4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

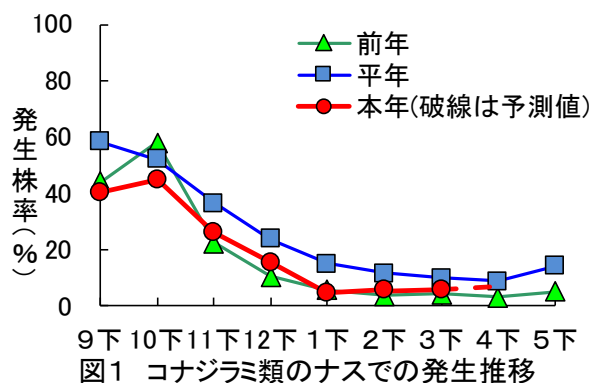
発生株率：5.4%（平年11.4%、前年3.5%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) アザミウマ類の項と同じ。

(2) 特記事項（施設果菜類）を参照。



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容 (4月～8月上旬)

発生量：平年並 (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査 (平成31年2月に調査、表1)

①越冬地点率：54.5% (平年39.1%、前年68.2%)

平年比：やや多 (±～+) 前年比：やや少 (－～±)

②平均越冬虫数：0.24頭/m² (平年0.27頭/m²、前年0.67頭/m²)

平年比：並 (±) 前年比：少 (－)

3) 防除上注意すべき事項

(1) [平成31年3月13日付け病害虫対策資料第15号を参照。](#)

表1 チャバネアオカメムシの越冬状況の調査結果

調査地域	H31	平年 ²⁾	H30	H18 (多発年)
	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²
みやき町	0.3 ¹⁾	0.57	1.0	－
吉野ヶ里町	0	0.13	0.3	1.7
神崎市	0.7	0.79	0.7	0
佐賀市	0.3	0.14	0	1.2
小城市	0	0.06	0	0.3
多久市1	0	0.10	0	0.3
多久市2	0	0.13	1.0	－
唐津市1	0.3	0.13	0.7	1.2
唐津市2	0	0.03	0	－
唐津市3	0	0.10	0.3	－
伊万里市1	0	0.06	0	2.2
伊万里市2	0.7	0.27	0.7	－
伊万里市3	0.3	0.53	1.3	－
武雄市1	0.3	0.23	0.3	3.3
武雄市2	0.7	0.26	1.3	－
鹿島市1	0	0.33	1.3	1.4
鹿島市2	0	0.40	2.7	－
鹿島市3	0.3	0.30	0.7	－
太良町1	0.3	0.34	1.3	1.5
太良町2	0.3	0.41	1.0	－
太良町3	0.7	0.54	0	－
太良町4	0	0.20	0	－
平均	0.24	0.27	0.7	1.31
越冬地点率(%)	54.5	39.1	68.2	91.3

¹⁾各地点3か所(1か所/m²)の落葉を採集して持ち帰り、その中から確認した越冬虫数の平均

²⁾平年値はH21～H30までの10か年の平均

³⁾H14,16,18の平均越冬虫数は各市町毎に平均値を出して1地点としており、越冬地点率は延べ調査地点数で算出。

カンキツ

定期調査：8圃場

調査日：3月14～15日

1. そうか病

1) 予報の内容



定期調査圃場の様子

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 温州みかんでは、展葉初期（最も伸びた新梢が1cm程度）に薬剤防除を必ず実施する。

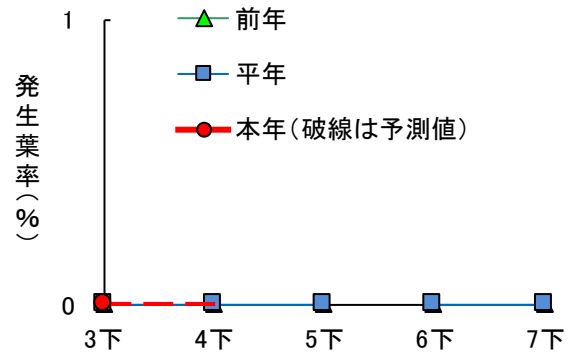


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.3%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 4月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

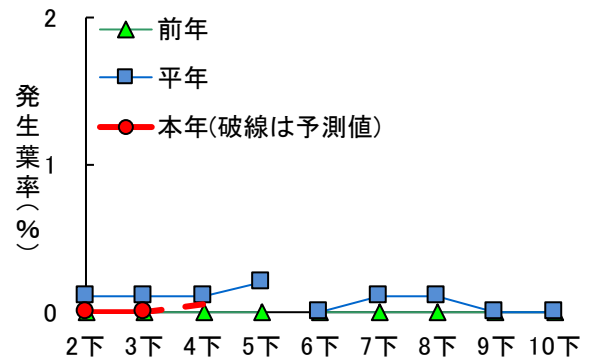


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：7.8%（平年1.5%、前年0.6%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 4月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量は平年よりやや少なく多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

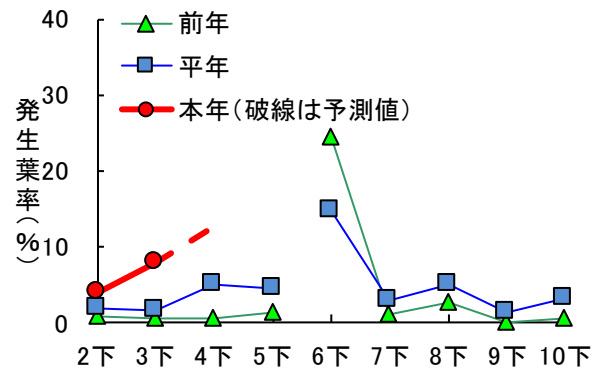


図1 ミカンハダニの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 昨年秋の発生状況

① 定期調査 (平成 30 年 9 月下旬)

発生葉率 : 0.2% (平年 0.9%、前年 0%)

平年比 : やや少 (一~±) 前年比 : 並 (±)

このことから、園内の菌密度は、平年に比べやや少なく、前年並と考えられる。

(2) 4 月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件 (一~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

ブドウ

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 昨年秋の発生状況

① 定期調査 (平成 30 年 9 月下旬)

発生葉率 : 0% (平年 0.1%、前年 0.5%)

平年比 : やや少 (一~±) 前年比 : やや少 (一~±)

このことから、園内の菌密度は、平年及び前年に比べやや少ないと考えられる。

(2) 4 月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件 (一~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照



茶

定期調査 : 7 圃場
調査日 : 3 月 14~15 日

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生葉率 : 1.1% (平年 7.7%、前年 3.1%)

平年比 : やや少 (一~±) 前年比 : 並 (±)

(2) 4 月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量がやや少なく、多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 一番茶萌芽後に発生がみられた場合は、摘採前日数に留意し防除を行う。

(2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

定期調査圃場の様子

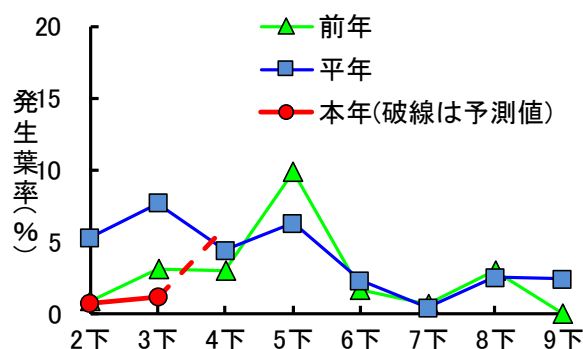


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

キク

定期調査 (8 圃場)
調査日: 3月14~18日



定期調査圃場の様子

1. 白さび病

- 1) 予報の内容
発生量: 平年並 (前年よりやや少ない)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査 (図1 参照)
発生株率 0.8% (平年 2.2%、前年 0%)
平年比: 並<±> 前年比: 並<±>
 - ②4月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件<±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 施設内が多湿にならないように適宜換気を図るとともに、薬剤による予防防除に努める。薬剤は、葉裏や下位葉にも十分かかるように散布する。

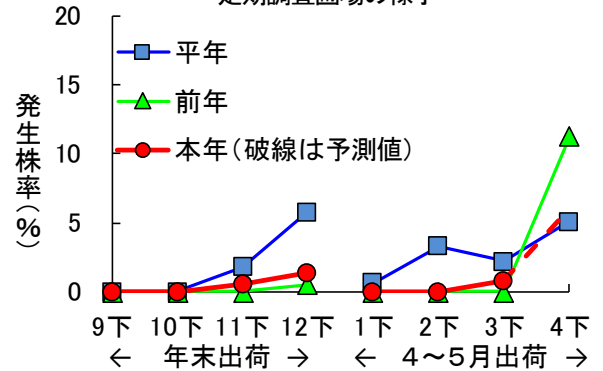


図1 キク白さび病の発生推移

2. アザミウマ類 (クロゲハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

- 1) 予報の内容
発生量: 平年より多い (前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査 (図1 参照)
発生株率 14.5% (平年 2.4%、前年 1.5%)
平年比: 多<+> 前年比: 多<+>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

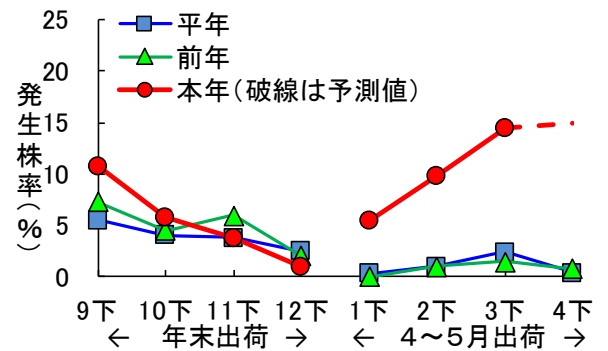


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査 (図1 参照)
発生株率 1.0% (平年 0.3%、前年 0%)
平年比: やや多<±~+> 前年比: やや多<±~+>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生初期の防除を徹底する。

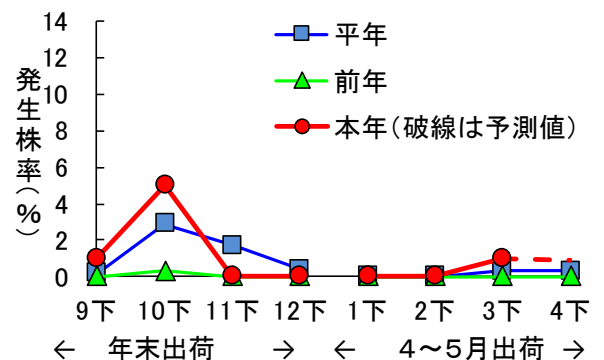


図1 アブラムシ類のキクでの発生推移

4. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 5.8% (平年 4.1%、前年 0.8%)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

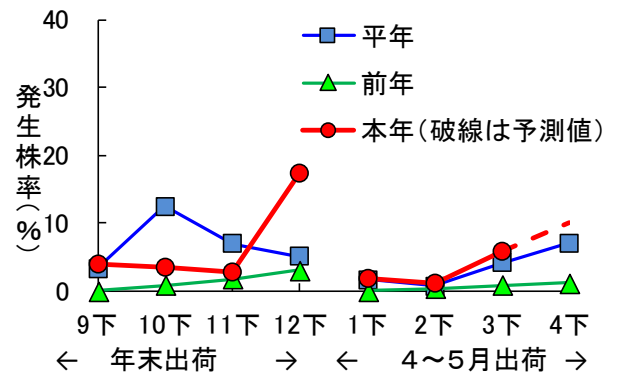


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp